

## 児童の期待に及ぼす能力認知の影響について

筑波大学大学院（博）心理学研究科 丹羽 洋子

筑波大学心理学系 高野 清純

Effects of perceived competence on expectations in school age children

Yoko Niwa and Seijun Takano (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The present investigation was to ascertain the ways in which individuals with high, moderate, and low perceived competence deal with evaluative feedback of an expected or unexpected nature. A  $3 \times 2 \times 4$  factorial design was employed. High, moderate, and low perceived competence subjects were given either success or failure experience regarding their performance on four times "mathematics test". Subjects' predictions for actual performance on next task ("level of expectation" and "confidence for expectancy level") were assessed. One could find that subjects with high perceived competence declined the level of expectation in failure experience condition, whereas subjects with low perceived competence did not increase the level of expectation in success, and that subjects with moderate perceived competence had no strong general expectations for either success or failure. Thus more importance of studying confidence for expectancy level than studying perceived competence as a predictor of academic attainment is suggested. Key words: school age children, perceived competence, expectation, academic achievement, success, failure.

自己概念（又は自尊感情）については、かつてから多くの研究がなされ、自己概念は、その後の認知や行動に影響を及ぼすことが見いだされてきた。その中で、Dipboye (1977) や Leonard (1971) により、自尊感情には2つの要素がある事が示されてきた。1つは、全体的自尊感情 (global self-esteem) であり、「個人が、自分自身についてもっている全体的価値や能力についての、比較的永続的な認知」を表す。もう1つは、状況的自尊感情 (situational self-esteem) であり、「特定の課題や状況の分脈での価値や能力についての個人の認知」を表す。このうち、全体的自尊感情は、過去の経験に基づく、成功・失敗の経験を含んだものである (Cohen, 1959)。これは、例えば Weiner (1974) らが、原因帰属の先行条件として、達成動機・過去の成功回数・成功失敗の

パターン等と共に提示した自己概念に相当するものと考えられる。従って、本研究で取り上げているのは、学業達成場面についての、状況的自尊感情である。（ここでは、これまでの一般的自己概念（又は自尊感情）と区別して、学業達成という場面specificな自己概念をとりあげ、以下これを能力認知と呼んでいる）

これまでのところ、自己概念（又は自尊感情）と期待の関係については、一般的に、高い自尊感情を持つ者は、常に成功を期待し、低い自尊感情を持つ者は失敗を期待するつまり低い期待を予測している、という結果が多くの研究の中で支持されており、自尊感情の高いほど期待も高まることが示されている。しかしこのような関係は、あくまでも平均値としての値であり、実際は、その場の状況（成功・失

敗経験)や、フィードバックや、課題の難易度・価値などによって、さまざまな自尊感情をもつ個人が、それぞれ異なった期待を持つものと考えられる。もしその様ではなく、自尊感情が高いほど、期待も高いという図式が常に成り立つならば、教育現場において、実際に達成の低い子どもは、自尊感情も低くなり、従って期待も低く、常にやる気も低いということになってしまうであろう。このような、直線の関係ではなく、さまざまな自尊感情(高・中・低)を持つ個人が、いずれの状況でどのような期待をもつかを明確にしていくことが必要ではないかと思われる。

Schlenker (1976)によると、高い自尊感情を持つ者は、成功経験を積み重ねているため、自信をもち、自分の自尊感情とあった好ましい結果は、好んで受け入れ、否定的な結果は、拒否する。他方、低い自尊感情を持つ者は、失敗経験を積み重ねているため、否定的な結果もすすんで受け入れ、むしろ好ましい結果を拒否する傾向がある、ことを見いだししている。また、Kimble & Helmreich (1972)によれば、中くらいの自己概念をもつ個人が、最も独立的で、適応がよいと述べている。すなわち、典型的に、高い自己概念を持つ者は、成功を期待し、低い自己概念を持つ者は、失敗を期待する。しかし、中くらいの自己概念を持つ者は、一般的に成功も失敗も期待することがなく、目的に応じて、その両方の起こりうる事を理解しているという。

しかし、「優秀な子どもほど、自己の能力を低く評価しがちである」(Meece, 1982)という結果や、自己高揚理論(self-enhancement theory)に示されているように、たとえ自己の自己概念が低くとも、自己の能力を高く維持しようとの試みから、防衛的に高い自己概念が評定される可能性があること、などを考え合わせると、能力認知と期待の複雑なメカニズムが予測される。従って本研究では、高・中・低それぞれのレベルの能力認知を持つ者が、自己の能力認知と異なった経験(成功経験・失敗経験)を受けたとき、それによって、次の期待がどのように影響するかについて、明らかにすることを第一の目的とする。

次に、期待の概念についてであるが、これまで「どれくらいできると思うか」という期待の高さのみから期待を捉えてきたのに対して、丹羽(1988)では、期待水準(level of expectation)と期待確信度(confidence for expectancy level)の2次元から、期待を測定することが可能であることが示されている。そこでは、期待水準は、実験的操作や使用される課題によって、やや変化しやすいものと推測され

る。一方期待確信度は「課題や一回ごとの結果とは独立に、形成されていると推測されよう」と述べられている。従って本研究では、これらの2つの期待概念を用いることによって、成功経験・失敗経験を積み重ねることにより、それぞれの期待がどのように変化するかを検討し、丹羽(1988)の推測が正しいかどうかについて検討することを第2の目的とする。

以上から、本研究の仮説としては、①能力認知の高群によって示されるであろう高い期待が、もし、自己の能力認知に基づいて、自ら適切な能力を持ち十分努力できるという信念から判断されているものであれば、失敗状況においても期待は高く維持されるであろう。しかし、もしその高い期待が、低い能力認知の裏返しであったり、単にその場の課題の複雑さのみから判断されたものであれば、失敗状況では、期待はそれに応じて低下していくものと予想される。この場合、高い能力認知は、必ずしも、高い期待を導くとは言えないと思われる。②中位の能力認知を持つ者についても、もし期待の判断が、自己の能力認知に基づくのであれば、彼らは、自己の能力がある時もない時もあることを知っているため、失敗状況でも成功状況でも、期待はあまり変動しないと考えられる。しかし、その時の、課題の複雑さなどによって、影響されるとすれば、期待の変化が予想されよう。③同様に、低い能力認知を持つ者についても、もし期待の判断が、自己の能力認知に基づくものであれば、成功経験をかさねても、それによって期待が有意に上昇することはないであろう。反対に、失敗経験を重ねると、有意に期待が減少することが予測される。しかし、課題の内容によって、影響されているとすれば、成功経験によって期待が上昇し、失敗経験によって、期待は減少するであろう。④期待水準は、成功・失敗経験によって、幾分変動すると思われるが、期待確信度は、実験室内での孤立した成功・失敗経験では、その強度は変化しにくいであろう。

## 方 法

**被験者** 神奈川県下の公立小学校5年生110名(男子58名,女子52名)

**実験計画** 3能力認知(高・中・低)×2経験(成功・失敗)×4試行(試行前・第1試行後～第3試行後)従属変数は、期待水準と期待確信度。能力認知と経験は被験者間要因、試行は被験者内要因であった。

**手続き** ①実験に先立ち、1週間前に、丹羽・高野(1988)により作成された、児童の能力認知測定尺

度が実施された。その結果に基づいて、まず能力認知の高・中・低の3群に分けられ、さらにそれぞれ成功経験群と失敗経験群の2群にランダムに振り分けられた。②まず最初に、「今から算数の問題を解いてもらう」事を教示し、それに対する試行前の期待水準と期待確信度が測定された。③第1試行実施—「算数テスト」として、5年生の問題だが、少し容易な問題を1試行につき3～4問与えた。④その後、結果の操作チェックの質問紙が行われた。⑤再び、第2試行前の期待水準と期待確信度が測定された。⑥同様に、第2試行・第3試行実施後も、結果の操作チェックの質問紙と期待が、それぞれ測定された。⑦実験はここまでで、終了だが第3試行続けて、失敗経験をうけた群のフォローアップのため、失敗経験群についてのみ、第4試行を実施した。内容は、5年生ならだれにでも解ける問題で、全員成功経験で実験が終了するよう意図された。また、今回の実験の目的について、「我々は、小学生のテストを作る会社に勤めているため、今の5年生が短時間の間にどれほど問題が解けるのかについてのデータを集めるため。従って、各自の達成結果については、学校の成績とは全然関係ない」ことが実験終了後、成功・失敗両群について説明された。その後、自省報告がとられたが、失敗群についても、最後に成功経験をもったことにより、「よくできた」「かんたんだった」「おもしろかった」などと述べられ、実験的操作による失敗経験は十分解消されたものと思われた。

**成功経験—失敗経験の操作** 課題内容は、成功経験群・失敗経験群ともに同じで、その操作のためには、時間制限法が用いられた。テスト内容は、やや簡単であるため、5年生であれば時間をかければ全問正答できるが、失敗経験群に対しては、2分で「やめ」と打ち切られた。成功経験群にたいしては、全員が解答できるだけの十分な時間をあたえ、制限時間5分とした。

**用いた質問紙** ①結果の操作チェックの質問紙—「あなたは、今の問題が、成功だったと思いますか。それとも失敗だったと思いますか」の質問に対して、“とても成功だった(6点)～とても失敗だった(1点)”まで、6件法で評定を求めた。②期待測定質問紙—「あなたは、次の問題は、どれくらいできると思いますか」の質問に対して、“絶対できる(10点)～絶対できない(1点)”まで、10段階で評定された。次に、「では、それはどれくらい確かですか」の質問について、“絶対たしか(10点)～全然自信はない(1点)まで10段階評定された。

**実施要領** 以上のような内容が、第一セッションの実験は、まず、能力認知高・中・低の成功経験群に

ついてなされ、第二セッションの実験は、能力認知高・中・低の失敗経験群について実施され、第三セッションは再び成功経験群というように、交互になされた。尚、実施に際しては、小学校内の図工室を使って、1グループ8～10名の小集団で実施された。

## 結果と考察

①成功・失敗の操作のチェック 結果の操作チェックの質問紙より、成功経験群は4～6点、失敗経験群は1～3点の得点を評定している者のみを対象とし、3試行中、1つでもこの条件に合わない得点を評定しているものは、成功・失敗の操作がうまくきかなかつたものとして、分析から削除された。その結果、実際の分析対象とされた人数はTable 1に示す通りである。

②期待水準の変化についての分析 まず、成功経験群について、能力認知のレベルごとの期待の変化をみたものが、Fig. 1である。3能力認知×4試行(被験者内要因)の分散分析を行った結果、能力認知の主効果が有意であり( $F(2, 36) = 9.77, p < .01$ )、また試行の主効果も有意であった( $F(3, 108) = 4.$

Table 1 各能力認知のレベルごとの分析の対象とされた人数

条件/能力認知	高群	中群	低群
成功経験	14	15	10
失敗経験	10	9	10

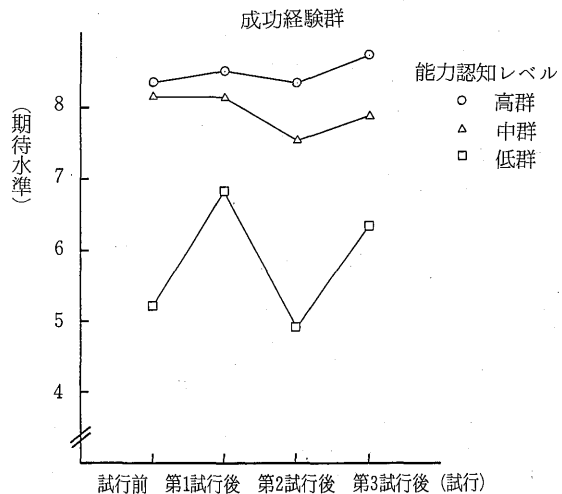


Fig. 1 各能力認知レベルごとの期待水準の変化 (成功経験群)

55,  $p < .01$ ]. しかし, 交互作用も有意であるため,  $[F(6, 108) = 2.16, p < .05]$  この主効果は制限される. 単純主効果の検定を行うと, 高群・中群ともに試行間に期待水準の差は見いだせなかったが, 低群においてのみ, 試行に変化が見いだされた  $[F(3, 108) = 7.47, p < .01]$ . しかし, 変動はしているものの, 全体としては, 成功経験を積み重ねても, 急激に期待が上がるものではない. ひとたび上がっても, 再びもとのレベルへもどっている. これは, 自己一貫理論 (self-consistency theory) と一致して, 自分についての, 一貫した態度を維持しようと努める傾向が示されていると考えられよう. すなわち, 前回課題が解けたから, 又次も解けるであろうという判断よりむしろ, 低群は, 低い自己の能力認知にもとづいて, 期待の高さを判断しているのではないかと思われる. 従って, 特に低群にとっては, 自己の能力が重要な要因となっていることが推測され, それだけに一度低い能力認知が形成されてしまうと, 成功経験を与えても, 自己の態度に一致しない経験は, 拒否されてしまうことが考えられる. 能力認知が低い群へのアプローチは, 単に外的に成功経験を繰り返し与えるだけでなく, それと同時に, 自分の能力についての, 低い認知にたいして, 「時によっては自分は有能であり, 成功を経験したときにはそれは自己の能力に基づくものである」と認知できるような働きかけが, 必要であると思われる.

次に, 失敗経験群については, Fig. 2 を見ても明らかのように「自尊感情の差は, 成功した時より, 失敗したときの方がより著しくあらわれる (Campbell, 1984)」ことがわかる. 3 能力認知  $\times$  4 試行 (被

験者内要因) の分散分析を行った結果, 試行の主効果が有意になり,  $[F(3, 78) = 14.31, p < .01]$  失敗経験を繰り返すことにより, 期待が有意に減少することがわかる. しかし, 能力認知と試行の間に, 交互作用が見られ,  $[F(6, 78) = 2.58, p < .05]$  能力認知の各レベルごとに, 異なった期待の変化をする事が示された. 単純主効果の検定を行うと, 高群は  $[F(3, 78) = 14.02, p < .01]$  で, 試行前から第3試行まで最も大きな減少を示している. 中群は, 反対に  $[F(3, 78) = 1.77, n.s.]$  で期待に変化は見られなかった. 低群については  $[F(3, 78) = 4.21, p < .05]$  でやはり減少していることが見いだされた. ここで, 最も明らかな結果な, 高群の極端な減少である. 高い能力認知をもつ個人は, 自己に自信をもち, 自己の認知にあわない経験は拒否する, とされてきたのに対して, 実際には, 失敗ごとに期待のレベルが下がっていることがわかる. これは, 仮説されたように, もし高群が自己の能力認知に基づいて, 期待を判断していれば, 自己の態度と一致しない失敗を経験したとしても, 期待は高く維持されたはずである. とすれば, 高群においては実験の時の課題によって, 次の期待を判断しているため, 第1試行の失敗の後, 急激に期待が低くなったものと考えられるのではないだろうか. 高群は, 一般的にいわれる課題関与型の子供が多いと予測され, 課題内容自体に動機づけられて, 課題を達成する事に, 喜びを見いだしている. とすれば, それほど難しくなく, 自らの能力で全部解答できるはずの問題であるのに, あと少しのところまで, ストップをかけられてしまい, これでは時間内に成功するのは無理と判断したために, 急激に期待のレベルが下がったものと考えられる. しかし, 普段, 失敗経験を重ねることの少ない高群にとって, もし失敗経験をこのように積み重ねる体験をしたなら, 本実験で得られたような, 急速な期待の減少をしめすものであるのか, それとも, 本実験のような時間制限法という成功・失敗の操作を用いたため, 「能力があっても, がんばっても, 時間が足りないのだから成功できない」とコントロールの認知を外的に帰属させたために, 期待の減少を示したのかどうかは, 実際のところ, 本実験結果からだけでは判断できないと思われる.

さらにこの結果について, もう一つ別の観点からの解釈が可能であり, それは, 自己概念の測度の混乱に関する問題であると思われる. 本実験での能力認知測定質問紙への反応をみると, 非常に高い能力認知を評定している児童のほとんどは, 実際の学業達成は, かなり低い子ども達であり, 実際には, どの程度の能力認知をもっているのかは, 疑わしい.

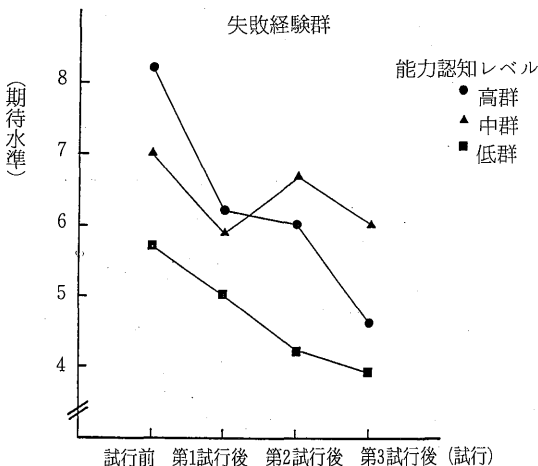


Fig. 2 各能力認知レベルごとの期待水準の変化 (失敗経験群)

反対に、非常に優秀な児童の能力認知は、中程度または、それ以下を評定していることが多い。Row dataを見たところでは、能力認知高群とされている群の中には、実際は低群であろうと思われる児童が、かなり含まれており、中群とされている群には、実際高群であろうと予想される児童がかなり含まれているため、実質的には、中よりも上であると考えられる。これは、あくまで、個人の成績から、能力認知を推測したものであり、実際には低群でもプライドを持っている児童もいる可能性があるが、いずれにしても、自己概念（自尊感情）や能力認知・有感情の測定には、防衛やBiasが含まれるため、これらに左右されずに、正しく測定できる尺度を開発する事が今後の課題であると思われる。

また、Fig. 2の中群は、失敗経験にもかかわらず、期待の減少は見られていない。前述したように、高い自信を持っている高群が含まれていることが、考えられるが、中群は課題の複雑さに影響されず、自己の能力認知を保持し続けていることがわかる。「中くらいの自尊感情を持つ者は、成功も失敗も起こりうる事を理解しており、最も現実への適応がよい」とした、Kimble & Helmreich (1972) の主張と一致するものである。以前から、自尊感情の極端に高いものは、失敗場面にもろく、また、現実の自己とあまりにもかけ離れていることが多いため、そのギャップが問題行動につながるなどが指摘されたが、ここでも適度に高い能力認知を持つほうがよい、事が示唆された。

③期待確信度の変化についての分析 成功経験群についての、能力認知レベルごとの期待確信度の変化が、Fig. 3に示されている。能力認知×試行についての繰り返された分散分析を行った結果、まず、

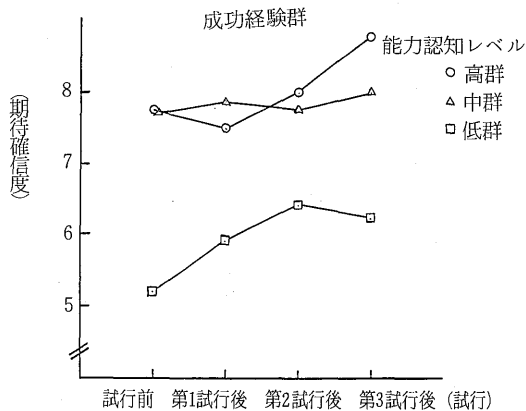


Fig. 3 各能力認知レベルごとの期待確信度の変化 (成功経験群)

能力認知のレベルの主効果が有意になり、 $[F(2, 36) = 7.06, p < .01]$ 能力認知のレベルによって、成功試行を重ねる事による、期待確信度の変動が、異なることが示された。成功経験群における期待水準の時もそうであったが、高・中群にはほとんど差がないことがわかる。一方、試行に関しては、実験室内での成功・失敗経験では、変化しないであろうと仮説されたが、これに反して、5%水準で主効果が見られた $[F(3, 108) = 3.24]$ 。下位検定の結果、能力認知高群は、 $F(3, 108) = 3.53 (p < .05)$ で、有意差が見られ、成功経験に従って期待確信度が増すことが示された。一方、低群については、 $F(3, 108) = 2.48 (p < .10)$ で、期待確信度が成功試行とともに増加する傾向があるとの結果にとどまった。

Fig. 1の期待水準と比較すると、高群においては、期待水準は上がっていきなくとも、成功に裏づけられて期待確信度は増していることがわかり、また、低群においても、期待水準は変動し、全体的な増加はあまり見られないが、やはり期待確信度は増している（統計的には、傾向にとどまったが）事がわかる。とするならば、期待確信度は、期待水準との独自のインターアクションの中で、経験の積み重ねによって、形成されるものではないかと推測される。

次に、失敗経験群については、Fig. 4に示されたように、分散分析の結果、いずれの主効果も交互作用も有意ではなかった。Fig. 2と比較すると、高群においては期待水準が極端に減少しているにもかかわらず、期待強度には変化のない事がわかる。これは1つには、高群は自己の能力について自信を持っているため、たとえ達成のレベルは下がったとしても、そこまでならできるという信念を持っているためと考えられよう。2つめには、本実験における失

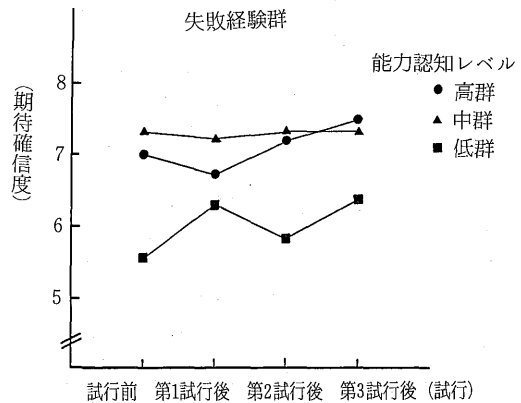


Fig. 4 各能力認知レベルごとの期待確信度の変化 (失敗経験群)

敗条件が、児童の能力認知を下げるような影響を与えきれず、その結果、失敗の原因が外的コントロールに帰属される可能性があったことがあげられよう。さらに、期待確信度に変動がなかったもう一つの理由として、本実験においてあらかじめ仮説されたように、期待確信度はかなり個人に固定的な認知であるため、実験での数回の成功経験（特に失敗経験）では、期待確信度に変化は起こり得なかったためと考えられよう。

### 要 約

本研究において、高・中・低の能力認知をもつものが、自己の能力認知と異なる経験（成功経験・失敗経験）を受けたとき、それによって次の期待がどのように影響されるかについて検討した。その結果、以下のような事が示唆された。

①能力認知の低群は、成功経験をうけても、期待水準はあまり上昇しない。これは、自己の能力認知に基づいて期待判断を行っているためではないかと思われる。また、失敗経験によって、低群の期待水準は有意に減少する。これらは、これまでの研究で支持されてきたような、「低い自己概念をもつものは、positiveな結果をうけいれず、negativeな結果は好意的に受け入れる（Schlenker, 1976）」ことと一致した結果と言えよう。

②能力認知の高群は、失敗経験を受けると、有意に期待水準が減少する。これは高群は、学業達成において課題自体に内発的に動機づけられているため、実験場面でも、課題の複雑さから次の期待を判断しているためであると思われる。しかし、期待確信度については、失敗経験をかきねてもその程度は変化しない。反対に成功経験を重ねると、期待確信度が他の2群に比べて有意に上昇する。これは、「自尊心の高いものは、成功への自信を持ち、将来に対して高い期待を持つ（Mcfarlin & Blascovich, 1981）」ということの裏付けと考えられよう。

③能力認知の中群は、成功経験をを受けたときは、高群と同じレベルの期待水準を維持し、また、数回にわたる失敗経験においても自己の期待水準を維持し続けた。と同時に、中群の期待確信度は、成功・失敗いずれの条件下でも変化せず、かなり安定した自信が形成されていると推測される。したがって、高くもなく低くもない適度な能力認知をもつ者が、いかなる条件のもとにおいても、最も適応が良いと考えられよう。

④期待確信度は、能力認知高群の場合には、成功経験を重ねることにより、わずかに上昇が見られた

が、全体としては、一回毎の試行によって変動するものでなく、個人の中で、比較的安定した認知として形成されているものと思われる。従って仮説は検証されたと考えられる。学業達成に及ぼす期待の効果についての、丹羽（1988）の結果にも示されているように「実際の達成に影響を及ぼすのは、期待水準よりむしろ期待確信度である」ことから、さまざまなレベルの能力認知を持った者の期待水準の変動を追うと同時に、その基礎となっている期待確信度の形成・変容について今後注目していくことが、課題ではないかと思われる。

以上から最後に考察されることは、一般的には能力認知の高い方が、期待が高いと考えられるのであるが、必ずしも、能力認知の高さが重要なのではないということである。本実験でも見られたように、能力認知の高群は、成功して調子の良いときはいいが、失敗経験に弱く期待がみるみる減少した。しかし、高群の場合、期待確信度が強いいため、おそらく、失敗経験によって期待水準が下がった後でも、達成行動をとってみるとやる気は減少していないものと予想される。要するに、ここでやる気に影響するのは、能力認知の高さや、変動する期待水準よりむしろ、期待確信度なのではないだろうか。

反対に、能力認知の低群は、能力認知が低いため、期待も低く従ってやる気がなく達成行動も低いと一般的に思われているが、常に低群はやる気がないわけではないと思われる。成功・失敗の操作のチェックの質問紙をみても、たとえ成績はよくなくとも自分では「まあ成功だった」と評価し、次回への期待は「絶対にできる」と以前より高い水準を評定している子どもも少なくない。つまりこのような子どもは、相対的に高群と比べれば能力認知は低いかも知れないが、がんばればこれくらいまではできるだろうという、自分の能力についての信念を持っている。したがって、能力認知が高かろうと低かろうと、その各自の認知にしっかり基づいて、自らが「ここまではできる」という確信（期待確信度）をもったならば、それは、動機づけの過程において「自分は、一生懸命頑張ったら、ここまではできる」という信念として働き、次の達成へのやる気につながるものと考えられよう。すなわち、やる気に影響するのは、能力認知の高低ではないのである。実際の達成に基づいて、高い能力認知を持つ者が、低い能力認知を持つ者が、いずれでもよい。重要なのは、それに基づいて、各自の能力についての正確な判断を持ち、それによって、ここまではできるという強い期待確信度を形成することではないかと考察された。

## 引用文献

- Cohen, A.R. 1959 Some implications of self-esteem for social influence. In I.L. Janis et al. (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven, Conn.: Yale University Press.
- Campbell, D.T. & Fiske, D.W. 1959 Convergent and discriminant validation by the multitrait-multimethod matrix. *Psychological Bulletin*, **56**, 81-105.
- Dipboye, R.L. 1977 A critical review of Korman's self-consistency theory of work motivation and occupational choice. *Organizational Behavior and Human Performance*, **18**, 108-126.
- Kimble, C., & Helmreich, R. 1972 Self-esteem and the need for social approval. *Psychonomic Science*, **26**, 239-242.
- Leonard, S. & Weitz, J. 1971 Task enjoyment and task perseverance in relation to task success and self-esteem. *Journal of Applied Psychology*, **55**, 414-421.
- McFarlin, D.B. & Blascovich, J. 1981 Effects of Self-esteem and performance feedback on future affective preferences and cognitive expectations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 521-531.
- Meece, J.L. 1982 Sex differences in math achievement: toward a model of academic choice. *Psychological Bulletin*, **91**, 324-348.
- 丹羽洋子・高野清純 1988 児童の能力認知と自己帰属と学業達成の関係について 筑波大学心理学研究, **10**, 127-137.
- 丹羽洋子 1988 児童の学業達成に及ぼす期待の影響について 教育心理学研究, **36**, 276-281.
- Schlenker, B.R., Soraci, S. & McCarthy, B. 1976 Self-esteem and group performance as determinants of egocentric perceptions in cooperative groups. *Human Relations*, **29**, 1163-1176.

—1988. 9. 30 受稿—